Case Study

生徒の未来につながる「言葉」を育てる高校事例

英語を中心とした外国語に関する学科や、国際関係に関する学科を設置している高校は少なくありません。学校設定科目などを通じて、各学校で取り組んでいる独自の外国語教育について、背景や目的、生徒たちの「言葉」との向き合い方や成長について取材しました。

取材・文／長島佳子

身近なことから世界の時事問題まで 幅広い外国語教育で生徒の視野を広げる

坂戸高校（埼玉・県立）

学校データ 1971年創立／普通科・外国語科／生徒数1056名（男子530名、女子526名）、1992年に外国語科を設置以来、普通科も含め多様な国際交流事業を行うなど、国際理解教育に力を入れている。

実用的な英語を使う機会を多様に設ける外国語科

埼玉県内に8校ある外国語科を有する公立高校の1つである坂戸高校。目指す学校像として「文武に秀で、地域に愛され、国際感覚を持つ社会のリーダーを育てる学校」を掲げる同校では、外国語科だけでなく普通科も含めた全校で、国際理解教育に力を入れている。外国語科の設置は1992年。各学年に1クラスのみのため3年間クラス替えがない。

「生徒同士や生徒と教員の関係性が密になるので『お互いに思いやりをもって過ごそう』と生徒たちに言っています。そのことで、発言しやすい安心・安全な環境が育まれていきます」（国際理解教育部主任・堀江舞衣先生）

外国語科では、英語の基礎的な4技能5領域の習得はもちろん、第2外国語として英語以外の言語を学んだり、図1のようなさまざまな専門科目で実用的に語学を学んでいる。

「生徒たちには“英語を”学ぶだけではなく、“英語で”多様なことができる力をつけてほしいと考えています。語学系や国際関係学部に進学する生徒が多いですが、看護や福祉、教育など進

図1 外国語科の専門科目

科目	1年生	2年生	3年生	内容
総合英語Ⅰ～Ⅲ	●	●	●	4技能を段階的に学習
ディベート・ディスカッションⅠ	●			論理的思考力を養い、英語で議論を行う
アカデミックイングリッシュⅠ・Ⅱ		●	●	発表ややりとりを通じて実践的に英語を学び、最終的に卒業論文執筆およびプレゼンを行う
異文化コミュニケーション		●		世界の文化・社会・価値観などを英語で学び、ディスカッションなどを通じて考えを深める
グローバルスタディーズ			●	ニュースや新聞を通じて、世界で起こっているさまざまな時事問題を英語で学び、高度な英語力を身につける
第2外国語		●	●	中国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語のいずれかを選択

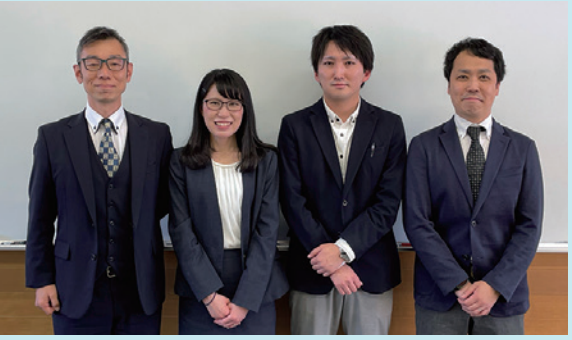
路選択はさまざまです。海外のニュースなどを授業のリソースとすることが多いため、生徒たちの視野が広がっていくようです。授業が生徒たちのやりたいことを見つけるきっかけづくりになっているのです」（外国語科長・前田英之先生）

生徒の視野を広げるための科目の1つが2年生の「異文化コミュニケーション」だ。世界の文化・社会・価値観などを英語で学んでいく。

「他文化を知るには自文化を理解する必要があると考えています。異文化コミュニケーションの授業では、まず自分自身について英語で考え、アイデンティティーを知ることから始めます。例えば、Step to the lineゲームという、さまざまな質問に答えていくゲームを通じて、自分と他の人の考え方の違いを知り、身のまわりにある他文化を探すことで、偏見をもたずに他者を見ることを楽しく学んでいきます」（英語科教科主任・嶋津昌樹先生）

アウトプットの機会が多く楽しみながら生きた英語を学ぶ

外国語科には2名のALTが常駐。いつでも生の英語を試せるなど、学んだことのアウトプットの機会を多く設けている。



写真左から、廣瀬純一教頭、国際理解教育部主任・堀江舞衣先生、英語科教科主任・嶋津昌樹先生、外国語科長・前田英之先生

3年生の「グローバルスタディーズ」の授業では、英字新聞や英語ニュースなどリアルな素材を用いてコンテンツベースで世界の時事問題にアプローチする。学んだことをアウトプットするために、生徒たちが自分で関心をもった題材でオリジナルのニュース原稿を作り、キャスターになりきって英語ニュース番組風の動画を撮影して発表している。内容はフィクションでも良いとしており、生徒たちが楽しんで英語を使っている様子が映像からうかがえる。

授業で身につけたことは、学校内外のスピーチコンテストや英作文コンテスト、ディベートコンテストなどへ出場することで、さらに磨きをかけている。

3年間の集大成としての英語の卒業論文

スピーキングやライティングの力を系統的・総合的に養うための授業が1年生の「ディベート・ディスカッションⅠ」と、2・3年生の「アカデミックイングリッシュⅠ・Ⅱ」だ。クラスをチーム分けして少人数制で「書いては話す」を繰り返していく。

1年生ではプレゼンテーションや自分たちでストーリーから作る英語劇を通じて、論理的な思考や自分の思いを伝える表現力を身につける。2年生では社会問題などをテーマに自分の意見の発表やディベートを行う。その集大成が3年生の卒業論文だ。自分の関心事をテーマに英語で論文にまとめ、さらにプレゼンシートも作

成してクラスの前でプレゼンと質疑応答を行う。

「生徒たちは3年間の多様な専門科目を通じて、英語の表現方法など技能から、世界にあふれる社会課題まで、たくさんのことを吸収していきます。その吸収した成果を自分の考えという形で発信する場が卒業論文なのです」（堀江先生）

「外国語科の卒業論文とは別に、総合的な探究の時間でも研究・発表を行っていますが、外国語科の生徒たちは日本語での発表の組み立てもうまいです。日頃から考えを言語化してまとめる学びが多いため、日本語能力も相乗的に上がっていくと感じています」（嶋津先生）

全校生徒を対象に、多様な国際理解教育を実施

坂戸高校では、外国語科だけでなく普通科の生徒も含めた全生徒の国際感覚を養うために、オーストラリア研修や、外部講師を招いてのグローバルセミナーなど、さまざまな国際交流事業を行っている。

オーストラリア研修はホームステイしながら現地の学校の体験授業を受ける。コロナ禍で停止していたが今年度から再開し、希望者対象で今年は25名の生徒が7月に2週間渡豪する予定だ。外国語科からだけでなく普通科からも応募があった。

グローバルセミナーでは外務省やEU、JICAなどから講師を招き、世界の現状について生の話を聞く。

「世界情勢を知り視野が広がる体験は、進路

図2 外国語科の学校設定科目の取組の一部

アカデミックイングリッシュ

論理的な思考を身につけ、自分の考えを英語で話したり書いたりする表現力を身につけ、3年生で卒業論文を書いて発表する。

1年生は「ディベート・ディスカッションⅠ」で、自作のストーリーの英語劇などを実践。

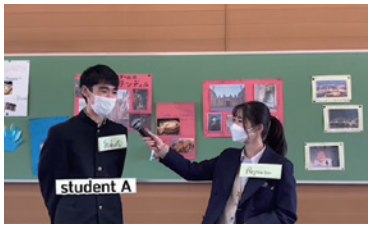
卒業論文のプレゼン。質問する側も英語なので、仲間の発表を理解し発信する力が求められる。

卒業論文は冊子にまとめられる。テーマは環境問題から、癒しの方法など多岐にわたる。

アカデミックイングリッシュ

3年生の「グローバルスタディーズ」ではCNNの教材などを使って世界の時事問題をリスニング、リーディングで学び、学んだ内容をディスカッションして自分の意見をまとめる。最終的に、自分たちでオリジナルのニュース動画を作成する。

自分たちで作成した英語のニュース原稿を、キャスターになりきって話す動画を作成。



ニュース映像には英語での街頭インタビューなども盛り込むなど、生徒たちの工夫が見られる。

選択の幅を広げるので、普通科の生徒たちにも必要です。世界に通じているさまざまな大人の話が聞けるように、講師選択は我々教員がアンテナを張って探し、直接依頼をしています」（堀江先生）

身につけた思考力や発信力でよりよい世界を創れる人材に

教室の内外で多角的に学んでいる外国語科の生徒たちは、語学力だけでなく、思考力や積極性など自身の成長を実感している（左記参照）。

「外国語科に来る生徒が必ずしも英語が好きで得意とは限りません。しかし、『英語を話せるようになりたい』と志をもって入学した生徒たちが楽しみながら、自信がもてるようになる授業を目指してきました」（嶋津先生）

例えば、リーディングの教科書で扱っているトピックは難しい題材が多いことから、最初は生徒にとって身近なスマホやSNS、マンガなどの話題から入る。すると自分の興味があることを英語で伝えたいという気持ちがわき上がり、生徒たちは自ら学ぶようになってくる。

「我々英語教員は英語が好きなので、つい難しいところから入ろうとしてしまいますが、生徒の興味とは違うことをいつも肝に銘じています」（嶋津先生）

「AIで翻訳が簡単な時代に学校で英語を学ぶ意味は、『伝わった』経験で次のことにチャレンジしたくなる意欲を育てられることだと思います」（堀江先生）

「英語さえできればよいわけではありません。生徒たちの主体性や学びに向かう力も育てたい。カリキュラムは緻密に組み立てつつ、授業では教員があまり口出しせずに生徒の自主性に任せています。ただし、生徒の小さな変化を見逃さず、スイッチを入れるタイミングだけは外さないようにしています」（前田先生）

外国語を学ぶことで、生徒たちにどんな成長があり、今後どんな人材を送り出したいか、教頭の廣瀬純一先生はこう締めくくった。

「1つの外国語を学ぶことで、世界を見る窓が1つ増えます。窓が増えることで昨日まで見えていた景色が変わり、視点が増えた生徒たちは発想が変わっていきます。こうした若者たちが新しいことを創りだし、世の中に変化を起こしてくれることを期待しています」

図3 国際理解教育の取組

昨年度のグローバルセミナーでは、学習院大学の冨田祐一教授を招き、海外の大学での経験や英語学習の意義について語っていただいた。

30年前から実施しているオーストラリア研修。ホームステイしながら異文化を生で体験（写真は2019年度の活動）。

Students' Voice

2年生
新井聡馬さん

言語だけでなく新しい価値観に触れられ、成長の機会が多い！

本当は英語が苦手。それでも、外国語科に入ったのは、海外企業との仕事をしている父や叔父から「通訳を通すとうまく伝わらないこともある。自分で英語を話せた方がいい」と、日頃から聞いていたためです。それで英語をがんばろうと思いました。

がんばりたい気持ちはあるものの、もともと苦手なので、語彙を増やすために単語を覚えたりするのは大変です。でも、ALTの先生と会話して、覚えた単語を使って自分の言いたいことが伝わったときは、本当に嬉しいです。

将来はペットの看護関連の仕事につきたいと考えているのですが、ペットに関する文化や法制度、教育などは欧米の方が進んでいます。自分がそうしたペット先進国で学んで、日本に知識を還元したい気持ちがあり、そのためにも英語をもっとがんばりたいです。

うちの科は異文化について学ぶ授業が多く、今まで知らなかった価値観や文化に触れることができます。また発表の場も多様にあることで、内向的だった自分が、街で会った知らない外国人の方と会話できるほど積極性が身につきました。3年間クラス替えがないため、お互いを思いやりながら共に成長していけます。そうした成長の機会に恵まれた環境が気に入っています！

3年生
早坂百代さん

英語を話すために日本語の表現も考え、思考の幅が広がった

中学生のころから将来は英語教員になりたいと思い、英語教育に力をいれている本校の外国語科に入学しました。

ALTの先生とコミュニケーションを取る形式の授業が多く、トピックに添って自分の意見を書いたり、自分でストーリーを考えたオリジナルの英語劇を演じたり、4技能を満遍なく伸ばすことができていると思います。英語に関わらない日はないくらい、英語に触れる機会が多いことが一番のメリットです。土日は家で洋楽を聴いて、歌詞の意味を考えたりしています。

第2外国語はスペイン語を選択。みんながワイワイしていて、発言や質問がしやすい雰囲気が気に入りました。複数の言語を身につけられれば、たくさんの国の人とコミュニケーションできるようになれそうで嬉しいです。

外国語科に入って、英語力だけでなく、コミュニケーション力が上がったと感じています。英語が話せるようになるにつれ、伝えたいことがたくさん出てきました。英語を話すときに、まず「日本語ではどう表現するか？」を頭の中で考えるようになり、日本語の会話のバリエーションや思考の幅も広がってきたのです。そのことで、英語以外でも人と会話することが楽しく、コミュニケーション力の向上につながったのではないかと思います。

海外からの移住者や観光客が多い地域でリアルなコミュニケーションができる英語を習得

白馬高校（長野・県立）

学校データ 1951年創立／普通科・国際観光科／生徒数136名（男子70名、女子66名）、多数のオリンピアンを輩出するスキー部を有し、国際観光科は日本全国から生徒が集まる。コミュニティ・スクールとして地域から多方面で篤い支援を受けている。

観光資源を学びに変える地域と共にある学校づくり

白馬高校のある白馬村は、スキーや登山で国内はもとより海外からも人気を集める国内有数の観光地だ。この地域の環境に魅力を感じて移住した外国人は村の人口の1割を占める。同校に国際観光科ができたのは2016年。背景には生徒数の減少があった。

白馬、小谷両村は「白馬高校を育てる懇話会」での議論を経て、県教育委員会に対し「白馬高校の経営・運営に参加する地域案」を提出。県教委の検討・審議の結果、全国から生徒を募集する国際観光科の新設が決まった。これに合わせて、長野県初となる学校運営協議会も設置され、県・県教委・地域が連携して学校の支援を行う、新生白馬高校が誕生した。

同校が目指すのは、「多様な文化や環境に触れ、地域への理解と愛着を深めるなかで、自身や地域の未来を創造できる生徒の育成」であり、観光と英語を軸としながら幅広い学びに取り組めるカリキュラムを意識しているという。「観光の専門科を置く学校は全国にありますが、そこでの学びは①ホテルなど観光業での実務を学ぶ、②観光事業のマネジメントや政策を学ぶ、③地域の観光資源やその魅力化について学ぶ、の3つに大別されます。本校ではどれも学べますが、主に目指すのは③で、地域を多角的かつ深く理解し、持続可能なまちづくりを考える取組を通して自己実現を図ることを狙っています」（国際観光科主任・浅井勝巳先生）

卒業後は大学へ進学する生徒が多く、学部も多岐にわたっている。

「全国から集まる生徒のための寮は村が出資・運営し、学校と協力して生徒支援にあたっています。授業や課外活動で地域の皆さんが講師や活動場所の提供等で積極的に支援くださることで教育活動の幅が広がり、生徒の育成にもつながっています」（藤森 要教頭）

地元の魅力を実践的に伝える英語ガイドツアー実習

国際観光科では、学校設定教科「観光」に、「北アルプス学」（1年）「観光実務」（2年）、「観光まちづくり」（3年）といった特色ある学校設定科目を置き、地域の特性、観光産業の仕組

み、観光政策について学んでいる。英語でも地域環境を活かした多様な学校設定科目を設置している。

「英語でコミュニケーションを図りたいという生徒のニーズにあわせて、対話に力を入れた授業を展開しています」(浅井先生)

特徴的な科目が2年生の「観光英語」(旧課程「観光コミュニケーション英語」)だ。観光に特化した英語表現やホスピタリティについて実践的に学習する科目で、なかでも生徒による英語ガイドツアーが目玉となっている。

まず事前学習として、白馬地域で観光ガイドを務めている外国人ガイドを招いて、プロの仕事を体感。その後、生徒自らツアーの流れとガイドの内容を立案し、白馬・小谷在住の外国人をゲストに模擬ツアーガイドの実践に取り組む。ツアー中にはゲストから想定外の質問も出るが、仲間と協力してその場で調べて説明を乗り切っていく。

体験した生徒たちは、「会話の内容は理解して答えられたし、アイコンタクトもできたが、次はもっと表情を意識して会話を継続させたい」、「知っている単語を並べただけではゲストに伝わらないこともあった。文法もしっかり学びたい」など、気づいた課題を次の学びにつなげる意欲をみせている。

写真左から、国際観光科主任・浅井勝巳先生、藤森 要教頭

外部の人々との関わりでコミュニケーション意欲が高まる

英語ガイドツアーに限らず、白馬在住の外国人が学校の取組に協力してくれる場面は多い。また、バスターミナルやカフェを訪れた外国人にインタビューする活動も行っている。

「観光客の滞在期間を知るために、近隣のスキー場でアンケート実習をしました。対象は日本人観光客でも良かったのですが、生徒たちは果敢に外国人観光客に尋ねに行っていて、『外国人は短くても2週間、平均で1カ月も滞在している!』と、日本人観光客との違いに気づいて帰ってきました。コロナ禍で外部の人との交流が減ったことで、生徒たちも内向的になりつつあったので、人との関わりが生徒たちにとっていかに大事かを痛感しています」(浅井先生)

コロナ禍で止まっていた語学研修や海外との交流が昨年度から再開。日本に居ながらにして英国風の雰囲気と英語コミュニケーションを満喫できる、福島県のブリティッシュヒルズでの語学研修は昨年6月に実施。今年は学校を訪れたシンガポールの高校生たちとSDGsについての話し合いやお互いの伝統文化について紹介し合う交流を行った。今年度末には希

ブリティッシュヒルズでの語学研修

希望者を対象に、福島の滞在型語学研修施設であるブリティッシュヒルズで、2泊3日で英語漬けの生活を送る。

座学での英語の授業のほかに、英語でレクチャーを受けながら実際にお菓子を作ってみるなど、体験型で楽しく学んだ。

シンガポールの高校生徒との交流

シンガポールのPeicai Secondary Schoolの生徒19名が今年の5月に来校。

白馬高校が2020年に実施した「断熱プロジェクト」をもとに、持続可能な環境に関して共に学んだ。

望者による海外短期研修も再開する予定だ。

学校の外に出ることで地域の想いを受けとめる

外部との交流を含む多様なカリキュラムを通して、生徒たちの進路選択の幅も広がっていく。海外で学んでみたいという生徒も増加傾向だともいう。

「実習などで触れ合う外国人定住者の皆さんが日本で仕事や生活をする姿を見て、自分も海外で活躍できるかもしれないという発想が広がっています。留学した先輩の体験談も役に立ちますが、それ以上に身近にいる外国人の方の話に実感がわくようです」(浅井先生)

生徒たちの学びを保障する地域の支えも強力だ。生徒たちの語学研修費用の一部(最大20万円)を補助する制度のほか、英語検定などの受験料補助の制度も充実している。さらには、同校での学びを将来、村に還元してくれることを期待し、大学卒業後Uターンして村内の観光関連の仕事に就いた場合に、大学等在学中に受けた奨学金を最大100万円補助する

体験交流では、グループに分かれて日本の伝統的な遊びであるけん玉やコマ、弓道、ボルダリングを一緒に体験。

「白馬村ふるさと人材奨学金返還補助事業」を実施している。

「こうした手厚い事業があっても、生徒たちは初めから地域からの期待を意識しているわけではありません。ところが、学校から一歩出て、授業実習や課外活動で地域の皆さんと交流する機会を重ねることで、いかに白馬高校の生徒が地域から応援されているかを実感し、それによって地域への見方も変わっていきます。私たち教員は、そうした地域と生徒との橋渡し役としてこれからも活動を続けていきたいと思っています」（浅井先生）

＼ 英語ガイドツアーの取組 ／

事前学習

秋に実践する英語ガイドツアー実習に向けて、事前学習として日本で長期間活躍するプロの外国人観光ガイドを招き、英語ガイドの実際を学ぶ。

英語ガイドツアーの実践

現3年生が2年次に行った「観光コミュニケーション英語」の授業での様子。集合時から実践は始まりバス乗車中のガイドもこなす。

ゲスト役からの予想外の鋭い質問にもその場で調べるなど、生徒たちは自分たちのできることを模索して対応していた。

白馬発のオプショナルツアーの目的地として人気が高い、地獄谷野猿公苑と小布施、善光寺を回った。

14カ国にルーツをもつ生徒たちが集い 毎日が留学のように異文化を体感する

飯野高校（三重・県立）

学校データ　1974年創立／応用デザイン科・英語コミュニケーション科／生徒数457名（男子107名、女子350名）、1987年に設置された英語科を1999年に英語コミュニケーション科に改編。海外にルーツのある生徒を多数受け入れている。

三重県内の外国籍高校生が集まってくる飯野高校

飯野高校の全日制は、応用デザイン科と英語コミュニケーション科からなる。1999年に英語科から改編した英語コミュニケーション科は、当初は日本人生徒が英語を専門的に学ぶ科であった。しかし、三重県内の外国人居住者の増加にともない、同校で外国籍の生徒を積極的に受け入れるようになり、県内の各地から南米やアジアを中心とする外国籍の生徒が集まり始め、2008年に外国人生徒等教育のための加配教員が配置されるようになった。

同校では外国人生徒等をCLD生徒（Culturally Linguistically Diverse=文化的言語的に多様な背景をもつ生徒）と呼んでいる。CLD生徒の多くが英語コミュニケーション科に在籍。英語コミュニケーション科では日本人生徒を含め14カ国にルーツをもつ多国籍の生徒が日々共に学んでいるのだ。

「日本語がまったくわからないCLD生徒もいるため、『お互いを助け合おう』と生徒たちにはいつも話しています。特に日本人の生徒には、日本語で話すときは易しい言葉を使うようお願いしています」（英語コミュニケーション科主任・条内直美先生）

CLD生徒たちのために、外国人生徒支援専門員が常勤し、スペイン語とポルトガル語で授業サポートや通訳補助を行っている。また学校設定教科「国際」のなかに学校設定科目「日本語基礎A」などを設置。日本語で教科学習が困難な生徒には、国語、社会、理科、保健の取り出し授業も実施している。

（写真左）さまざまなルーツをもつCLDの生徒たちと日本人の生徒たちが、“普通に”混ざり合い、オープンに学び合っている。（写真右）お互いの母語を教え合うことが日常茶飯事。楽しみながら複数の言語が身についていく。

「違っていて当たり前」で生徒みんなの居場所ができる

日本人の生徒にとって英語コミュニケーショ

ン科のクラスは「毎日が留学状態」と、条内先生は語る。「“異文化”“多文化”と言うまでもなく“違うことが当たり前”。国籍だとか何語を話すかは重要ではなく、個人としてお互いを見ています」(条内先生)

母語が異なるため、最初は身振り手振りが中心だが、生徒たちは自然と助け合ってさまざまな言語を交えながらクラスメートとコミュニケーションをとっていく。

「日本人の生徒はわからないと先に進めない子が多いのですが、CLDの生徒たちはわからないことを恥ずかしがらずに隠さず伝えてきます。その姿を見て日本人の生徒たちが『わからないと言っていいんだ』と気づき、ありのままの自分を出せるようになっていきます」(丸山竜司教頭)

お互いのありのままを受け入れる環境に、多くの生徒が居心地の良さを感じるようになる。中学まで不登校だった生徒が自分の居場所を見つけて毎日登校するようになったり、入学当初はCLD生徒と馴染めなかった日本人生徒が、「違う」ことを気にしなくなり、サポートする側に変わっていったりもする。

CLD生徒たちに影響を受けるのは日本人生徒だけではない。教員も変わっていくという。

「日本語も英語も理解できない生徒にどう伝えていいか迷ったときに、以前は『教員だからわからないとは言えない』と思っていました。でも生徒たちを見て正直に言ってもいいと思えるようになり、『先生もわからないから』と、ネイティブの生徒に頼るなど、生徒たちとフラットに学び合えるようになりました。本校の教員は上から引っ張るのでなく、身近にいる大人の一人として生徒に接しています」(英語科・橋谷優希先生)

写真左から、今高成則校長、英語コミュニケーション科主任・条内直美先生、英語科・橋谷優希先生、丸山竜司教頭

英語科の先生だけでなく、数学科の先生が、ポルトガル語の数字の読み方を覚えるなど、工夫しながら生徒たちと寄り添う方法を模索し、自身を変える努力をする。教員が変わることで、授業中に下を向いていた生徒たちが顔を上げるようになっていく。

「顔を上げさせたら教員の勝ちなんです。そこから授業はスムーズになります」(丸山教頭)

英語で自分の考えをスピーチできる力をつける

英語コミュニケーション科では①英検2級・準1級以上を取得する、②英語を使って行動、スピーチ、プレゼンテーションができる、③卒業してからも、自ら英語学習ができる、の3つを目標とし、さまざまな専門科目の授業を実施している。英語の基礎を学ぶ総合英語、英語で自己

表現をするエッセイライティング、ニュースや新聞記事などを理解し論点整理するアドバンストライティング、ディベート・ディスカッションなどの授業を経て、4技能をバランスよく身につける。3年生の英語表現演習では、全員が自分で見つけたテーマについて英文で書き、プレゼンテーション型スピーチと説得型スピーチの発表を行う。そこで代表となった生徒は市民会館のホールで発表を行うことが科のゴールだ。

英語関連の行事も豊富で、ALTと英語でコミュニケーション活動をしたり、プレゼンテーションを学ぶサマーセミナーや、英語のスペシャリストによる講演やワークショップなどを実施。校外のスピーチコンテストに参加し高い実績をあげる生徒も多い。

多言語を駆使できる人材の存在を社会に広めていきたい

日本人の生徒の多くが卒業後に大学や専門学校に進学、あるいは正社員として就職することに対し、CLDの生徒たちは進路が不安定な傾向にある。高い英語力があっても進学先で日本語での授業についていくことが難しいことや、働くことに対する考え方の違いから非正規雇用を希望する生徒も少なくない。その結果、本人の希望とは別に帰国する卒業生もいる。一方で、母語・日本語・英語の3カ国語が使え、ワールドワイドなパイプ役として即戦力となる人材としての期待が地域社会に知られていない課題がある。

飯野高校の特徴を知ってもらう地域活動として、近隣の小学校でさまざまな言語の出張授業を行っている。

「飯野リトルワールド」と称し、チーム分けしたグループに属する生徒たちの母語で、1つの単語を表現して発表。

市民会館のホールでの英語表現演習発表会。英語コミュニケーション科の代表が、全校生徒の前でスピーチを行う。

「CLDの生徒たちが長く日本で暮らせるために、地域の企業に生徒たちの存在や能力を知ってもらえれば進路選択の幅がもっと広がります。そのために、生徒と地域社会の人が交流できる場を一層増やしていかなければならないと考えています。そして生徒たちには、学校で養った垣根のない感覚を活かし、インクルーシブな社会を実現していける人材になってほしいと願っています」（粂内先生）

＼ Students' Voice ／

2年生
ウィハラ エリケーワラさん

英語を身につけて、イギリスの大学で獣医学を学びたい

父の仕事の関係で2年前にスリランカから来ました。日本はクリーンで人々が礼儀正しくて大好きです。日本に来たときは日本語がまったく話せずコミュニケーションをとるのが大変でしたが、飯野高校では日本語と英語が学べて、さまざまな国から来た友達がいるので、いろいろな言葉で話せるのが楽しいです。先生たちがとても親切で、困ったときにいつも助けてくれるので学びやすい学校です。

自分にとっては日本語も英語も外国語。日本語は覚えなければならない文字が多く、漢字が難しいので英語の方が得意。将来は獣医になりたいので、生物学や獣医学を学べる大学に進学したいです。でも、日本語での受験は難しいので、英語の勉強をがんばって、イギリスの大学を目指しています。

1年生
吉川 心さん

自分と考え方の違う人を理解できる人間になりたい

英語コミュニケーション科を目指したのは、『VOGUE』というアメリカの雑誌が好きで、海外で活躍する編集者になりたいと思ったからです。『VOGUE』はファッションだけでなく、LGBTQをはじめ、多様な考え方の人についてとりあげているのが魅力。私は自分とは違う考え方の人を理解できる人間になりたいと思っているからです。本校にはいろいろな国のルーツをもつ友達がいるので、とてもいい環境です。多国籍の言葉を話すクラスメートと一緒に学び、知らなかった文化にも触れられて、毎日が楽しいです。「自分から英語で話してみよう」と、日々挑戦することの繰り返しで、1つできるようになるとまた次の目標が出てきます。挑戦の繰り返しを体験することで、将来の夢もよりはっきりしてきた気がします。